

三卷本『色葉字類抄』人事部・辞字部の性質

藤本 灯

一、はじめに

院政期に成立した三卷本『色葉字類抄』（以下、字類抄）の分類方法は、イロハ引きの下位に『和名類聚抄』と同じく伝統的な意義分類（「天象」「動物」等）を施したものであるが、この意義分類の在り方については従来十分に検討されてこなかった面がある。本稿では、この意義分類二一部の中でも一見収録語の特徴が明瞭でない（一方では互いに収録語が重複するようにも見える）「人事」「辞字」両部に収録された語を取り上げ、その性質を概観することにより、字類抄編者・橘忠兼の編纂方針に迫ることとする。

二、本研究の目的と方法

さて、本書「人事」「辞字」各部に収録された語は、具体的には例えば以下のようなものである。

□人事部 *字類抄の掲出順に掲げた。丸括弧内は主に第一位掲出字、／は改行を示す。異体字は通行字に改めた。

「イ篇」イク（生）・イヌ／又ヌ／イネタリ（寝）・イム（姪）・イケリ（殺）・イノチ（壽）・イヤシ（賤）・イキス（嘘）・イタム／イタシ（痛）・イコフ（息）・イトマ（暇）・イカル（曠）・イサム／又イマシム（諫）・イサム（勇）・イミナ（諱）・イラフ（聲）・イツク／イモキ（齋）・イツル／又ヨコヤイル（戈射）・イキオヒ（勢）・イヒウエ（饑）・イタハル／又イタハシ（勞）・イタハシ（憂）・イツハル／イタハリ（偽）・イテマス（幸）・イトクル／又イトヒク（綱）・イトヨル（權）・イシカキ（石聞）・イミサス（致齋）・イコモル（齋籠）・イチナリ（逸）・イトケナシ（幼）・イヤシクモ（苟）・イキトホリ／イキトホル（髻）・イキシカク（嘘）・イクサタチ（師）
・イシハシキ（膾・石抛・石彈）・イトアハス（綜糸）・イチラツテウ（壹越調）

□ 辞字部 * 同右

〔ム篇〕ムス(将)・ムス(蒸)・ムネ(宗)・ムク(醜)・ム
 へ(亘)・ムクフ(酬)・ムシル(莖)・ムシロ(寧)・ムカ
 フ/ムカへ(迎)・ムナシ(空)・ムスフ(結)・ムマシ
 (焚)・ムハフ(奪)・ムヘナフ(諾)・ムシカム(蝨)・ム
 クメク(蠅)・ムヘナリ(亘)・ムツカシ(蟲)・ムラカル
 (群)・ムチウツ(策)・ムネウツ(擊)・ムスホル(媾)

〔サ篇〕サキ(先)・サス(指)・サク(開)・サク(折)・サ
 ル/又サク(去)・サシ/セハシ(狭)・サイ(災)・サレ
 (邹)・サカユ(策)・サカフ(逆)・サタム/又サタシ/
 (定)・サクル(決)・サグル(探)・サガス(涼)・サラス
 (曝)・サ、ク(捧)・サツク(授)・サガル(下)・サ、フ
 (支)・サハル/サフ(障)・サカル(避)・サミス(編)・
 サラニ(更)・サガシ(阻)・サンズ(散)・サソフ(誘)・
 サラフ(擢)・サマス(除)・サマス(濾)・サカフ(堺)・
 サツス(察)・サカツ(擺)・サキタツ(先)・サカリ/サ
 カリナリ(盛)・サシラク(閑)・サイキル(邀)・サカサ
 マ(逆)・サマタク(妨)・サエツル(轉)・サヤカニ/サ
 カリナリ(亮)・サウサシ(寂)・サシハル(撥)・サバラ
 カ(正)・サスラフ(伶)・サシタツ(柱)・サカマキ
 (灣)・サシハサム(挿)・サシマワス(蓋)・サシマネク
 (塵)・サシカハス/サカツキ(接)・サカノホル(汙)・
 サシカクス(遮)・サシシリゾク(蓋)・サハヤカナリ
 (爽)・サカサマンス(倒)・サカシマナリ(逆)

右からも窺えるように、「人事」「辞字」部の相違点や共通
 点は、自ずから明らかであるように見える部分―例えば、
 「人事」には熟語(例…致齋・齋籠)や遊戯名(例…イシハ
 シキ)・雅楽用語(例…壹越調)が収められていること、「辞
 字」は単字によるものが主であること、両部とも原則として
 音訓の配当字数順に排列されていること等―もあるが、実際
 には「人事」「辞字」部の収録語全体を対象として検討しな
 ければ、明確なことは言えないであろう。

そこで本稿では、「人事」「辞字」部の全見出し語を対象と
 し、特に所収語の語数や注記といった表面的特徴の差異に注
 目しつつ、字類抄の内部検証を行うこととする。

三、先行研究

先述のごとく、本研究に先立つ研究は乏しいが、類するも
 のとして次の二点に関するものが挙げられる。

- A 字類抄の「人事」「辞字」部についての研究
- B 古辞書の分類法についての研究

A について、「人事部」「辞字部」の大枠を示したものは各
 種影印等に付録の解説を始めとして既に幾らか存在するが、

いずれも任意の語を対象とした概観の域を出ない。

また本研究の目的とは多少離れるが、両部を対象としたものとして峰岸明氏の御研究「注一」があり、特に次に引用する結論は、字類抄研究全体の中でも肝要な指摘として今日に残る。

院政期乃至鎌倉時代の漢字片仮名交り文において使用された漢字は、『三卷本色葉字類抄』各篇人事・辞字両部所収各項目に採録掲出された諸漢字中、掲出第一位の漢字七五・七％、掲出第二位の漢字六・五％、掲出第三位の漢字二・六％などと掲出最上位の漢字に集中するのである。

字類抄の意義分類全体、またこれを含むBに関しては、

「古辞書における意義分類の基準」

(築島裕／『品詞別日本文法講座二〇』所収／1991)

『古辞書と国語』 (吉田金彦／臨川書店／2013)

等があるが、主に先行古辞書や意義分類体辞書との関連についての指摘であり、本稿では参照するに止めたい。「注二」

以上の点を念頭に置きつつ、本研究では改めて両部語彙を取り上げ、分類整理の対象とすることとする。

四、「人事部」「辞字部」所収語の特徴

次の〈表一〉〈表二〉に、三卷本『色葉字類抄』「人事部」「辞字部」所収語彙の各篇見出し語数、配当語数等の基本情報を示した。

□凡例

- ・調査には主に前田本を用いたが、前田本の欠ける部分は黒川本を用い、「黒」と記した。
- ・「人事部」の見出し語数は、雅楽関連の用語に関しては、複数語の掲出があっても一篇あたり一語扱いとしたものである。
- ・音注や他の注文において、欠損や擦れなどにより判読不能なもの、注として不適当なもの、また分類し難いもの(例えば「見左部」(サ篇を参照せよ)など極少数しか現れない形式のもの)について、表に計上しなかった場合がある。一方で、注として不完全な場合(例えば反切注の「反」字が欠けるものなど)でも特定の注記と認定した場合があるなど、全般として柔軟に分類した。
- ・注記の数は一語(多くの場合一字)に複数が付される場合でも一種の注につき上限一として計上した。熟語や仮名に付された声点についても同様に処理した。
- ・「声点・漢字」欄は見出し語の漢字に声点が付されたも

の、「声点・仮名」欄はその訓（読み）の片仮名に声点が付されたものを指す。

・「字体」欄は「イ本〇」「又作〇」「〇正字」等の注記を総合して計上したものであるが、特に黒川本の「〇敷」等の形式によるような書写者の私説と考えられるものについては計上しなかった。

・「意味・用法」欄は、見出し語の意味に関する注記（多く「〇〇也」の如き形式をとるもの）を指す。

例：「穀 イケリ 生也」（人事部・イ篇）

例：「鑄 イル 造金也」（辞字部・イ篇）

ただし次の「熟語・例文」の凡例に示すものは除いた。

・「熟語・例文」欄は実質的には右の「意味・用法」欄と区別し難い面があるものの、便宜的に、見出し字を「―」で示しつつ語句や例文を載せるものをここに分類した。

例：「姪【平声】 イム 一欲」（人事部・イ篇）

例：「祖（イヌ） 日月―是也」（辞字部・イ篇）

・「関連語」欄は、例えば「辞字部」（イ篇）の「射」の項目に「飲羽」注記（『韓詩外伝』『射石飲羽』）があるものなど、漢籍出典の関連語を載せるものを指す。

〔表二〕「人事部」語数等

篇	見出し語数	配当語数	一語あたりの用語数	音注				注文				
				反切	音一	声点漢字	声点仮名	字体	意味用法	熟語例文	出典	関連語
イ	37	292	7.89	0	0	20	4	1	6	9	0	0
口	4	5	1.25	0	0	1	1	0	2	1	0	0
ハ	25	218	8.72	0	0	19	4	3	5	9	0	0
ニ	4	29	7.25	0	0	3	1	0	0	1	0	0
ホ	17	72	4.24	0	0	4	7	1	3	5	0	0
ヘ	6	20	3.33	0	0	4	2	0	3	1	0	0
ト	13	39	3.00	0	0	6	3	0	2	0	1	2
チ	10	22	2.20	0	0	1	2	0	2	0	0	2
リ	5	11	2.20	0	0	2	0	0	0	2	0	0
ヌ	4	14	3.50	0	0	1	0	0	1	1	0	0
ル	0	0	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヲ	17	166	9.76	0	0	7	1	1	4	8	0	0
ワ	19	136	7.16	0	0	14	0	1	2	7	0	0
カ	33	209	6.33	0	0	25	7	5	2	7	0	0
ヨ	11	74	6.73	0	0	5	4	0	0	3	0	0
タ	黒 29	207	7.14	0	0	0	0	1	3	6	0	1
レ	黒 6	6	1.00	0	0	0	0	0	1	1	0	1
ソ	黒 9	47	5.22	0	0	0	0	0	0	3	0	0
ツ	黒 24	189	7.88	0	0	0	0	0	6	5	0	0
ネ	黒 11	81	7.36	0	0	0	0	2	2	3	2	0
ナ	黒 21	133	6.33	0	0	0	0	1	3	4	0	0
ラ	黒 5	8	1.60	0	0	0	0	1	0	2	0	0
ム	黒 7	42	6.00	0	0	0	0	2	1	5	0	1
ウ	黒 30	248	8.27	38	2	0	0	5	4	5	0	1
ヰ	黒 6	13	2.17	3	0	0	0	0	0	2	0	0
ノ	黒 14	43	3.07	7	1	0	0	1	1	4	0	0
オ	黒 26	171	6.58	24	1	0	0	1	3	6	1	0
ク	黒 32	96	3.00	14	1	0	0	1	5	7	0	0
ヤ	黒 13	90	6.92	10	3	0	0	2	3	12	0	0
マ	黒 28	138	4.93	16	6	0	0	4	1	7	0	2
ケ	14	18	1.29	5	0	0	0	0	3	4	0	1
フ	14	81	5.79	15	2	0	0	0	2	10	0	0
コ	26	137	5.27	20	3	10	3	3	4	6	0	1
エ	7	11	1.57	4	0	0	5	2	2	3	0	0
テ	15	28	1.87	3	1	0	3	1	2	4	0	0
ア	32	191	5.97	27	1	11	5	4	12	9	0	0
サ	29	137	4.72	21	0	13	7	2	8	15	0	0
キ	14	29	2.07	5	1	6	4	0	2	3	0	0
ユ	10	63	6.30	12	2	7	1	0	1	3	1	1
メ	黒 6	29	4.83	3	1	0	0	1	2	0	0	0
ミ	黒 12	75	6.25	7	0	0	0	0	2	10	0	0
シ	31	123	3.97	18	4	11	2	0	6	16	0	0
ズ	7	15	2.14	5	0	0	2	2	0	0	0	0
ヒ	15	42	2.80	4	0	4	2	0	6	2	0	0
モ	16	33	2.06	5	0	3	2	2	3	5	0	0
セ	10	27	2.70	6	0	1	3	0	4	0	0	0
ス	13	38	2.92	4	0	4	0	1	4	2	0	0
計	737	3896	5.29	276	29	182	75	51	128	218	5	13

〔表二〕「辞字部」語数等

篇	見出し語数	配当語数	一語あたりの の用字数	音注				注文				
				反切	音一	声点 漢字	声点 仮名	字体	意味 用法	熟語 例文	出典	関連語
イ	69	426	6.17	2	0	21	12	4	11	23	1	1
ロ	3	3	1.00	0	0	1	0	0	0	0	0	0
ハ	67	390	5.82	0	0	15	20	3	11	39	2	0
ニ	19	151	7.95	0	0	6	1	1	3	10	0	0
ホ	22	196	8.91	0	0	8	6	1	2	12	0	0
ヘ	10	39	3.90	0	0	1	2	0	1	1	1	0
ト	43	619	14.40	1	1	27	8	7	12	36	1	0
チ	11	66	6.00	0	0	3	4	0	1	1	0	0
リ	3	3	1.00	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヌ	10	64	6.40	0	0	3	2	0	3	3	1	0
ル	0	0	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヲ	38	275	7.24	0	0	3	0	0	5	25	0	0
ワ	20	157	7.85	0	0	3	2	1	3	12	0	0
カ	125	883	7.06	0	0	31	24	8	23	90	2	0
ヨ	24	257	10.71	0	0	7	3	2	2	13	0	0
タ	黒	75	671	8.95	0	0	0	7	8	35	0	0
レ	黒	4	6	1.50	0	0	0	0	0	2	0	0
ソ	黒	27	172	6.37	0	0	0	0	5	26	1	0
ツ	黒	59	685	11.61	0	0	0	6	22	58	3	0
ネ	黒	4	27	6.75	0	0	0	2	1	3	1	0
ナ	黒	55	309	5.62	0	0	0	4	14	14	2	0
ラ	黒	3	6	2.00	0	0	0	0	0	0	0	0
ム	黒	22	131	5.95	0	0	0	0	1	4	9	0
ウ	黒	48	446	9.29	42	9	0	9	13	42	0	0
ヰ	黒	6	14	2.33	1	0	0	1	3	4	0	0
ノ	黒	19	212	11.16	32	7	0	2	9	29	0	0
オ	黒	35	406	11.60	37	2	0	4	10	36	0	0
ク	黒	53	294	5.55	35	7	0	3	6	12	31	2
ヤ	黒	23	249	10.83	28	5	0	3	5	14	1	0
マ	黒	52	414	7.96	51	5	0	2	7	28	0	1
ケ		16	64	4.00	16	4	0	0	3	7	9	0
フ		24	208	8.67	30	5	0	0	3	3	15	0
コ		50	312	6.24	49	7	12	14	3	14	31	1
工		6	40	6.67	3	3	4	1	1	2	4	0
テ		7	7	1.00	4	0	0	6	0	4	0	0
ア		96	817	8.51	86	11	35	17	7	20	61	2
サ		57	317	5.56	49	7	11	17	2	13	37	1
キ		25	185	7.40	22	1	11	2	2	5	21	1
ユ	(黒)	24	135	5.63	15	0	3	1	0	2	14	1
メ	黒	8	88	11.00	12	0	0	0	1	0	9	0
ミ	黒	19	175	9.21	16	4	0	0	1	5	11	0
シ		55	432	7.85	51	8	23	10	6	22	40	1
ズ		3	11	3.67	2	0	2	0	1	1	0	0
ビ		39	322	8.26	42	6	12	7	3	13	32	0
モ		32	250	7.81	36	5	13	5	3	12	20	1
セ		13	77	5.92	8	3	5	6	2	5	11	0
ス		35	351	10.03	38	3	9	2	3	10	29	0
計		1458	11362	7.79	708	103	269	175	115	328	940	26

前表の結果から、またその補足として指摘出来る両部の特徴の差異を観察、分析すると、次のようである。

見出し語数—「人事部」三八九六語、「辞字部」一一三六二

字といずれも大量の語を収める。単純な比較は無意味であるが、「辞字部」は「人事部」の約二・九倍（以下、数値は全て概数）の語彙量を擁するということであり、「辞字部」語彙掲載に費やされた紙幅からも直感されるように、字類抄の中心的部分立であることが窺われる。

一項目あたりの用語／用字数—「人事部」五・二九語（雅楽

用語を除いても約五・二六語）、「辞字部」七・七九字であり、相対的に、「辞字部」の一項目あたりの配当字数の多さが際立つ。このことは「辞字部」語彙の意味的な特徴（比較的抽象度の高い物事を表す語群）と、漢文訓読の場で生じた一時的な訓との結び付きの広がりによるものと考えられる。

用語の構成字数（前表では省略）—先にも述べた通り、「人

事部」は雅楽用語を収録するが（三四篇に延べ一九八語を収める）、これらは全て二字以上の熟語形である。「人事部」全三八九六語からこれら雅楽用語を除いた延べ三六九八語中では、単字三五九八字、二字熟語九六語、三字熟語

四語である。対する「辞字部」はほぼ全て単字によるが、次の一例が例外となる。（傍線筆者、以後同様）

「釋　クラオロス　税卸已上同　卸鞍同」

（黒川本・中七八ウ）「注三」

排列（前表では省略）—両部とも三字の語形が多いが、これ

は「イヤシ」「ホコル」（人事部）「ヨハシ」「トナフ」（辞字部）のように、動詞や形容詞の終止形に三字のものが多いことによる。また六字以上になると「カタチミニクシ」「マコトナルカナ」（人事部）「サカシマナリ」「ナカヨリ

サク」「カクノコトク」「カルカユヘニ」（辞字部）のような連語や句（多く漢文訓読語）、形容動詞に偏っていくのも、自然のことである。また両部とも、字数により次第される点は先行研究にも指摘があるが、必ずしも原則に従わない例があることについて、排列の揺れであるのか語形の誤記であるのかを判断することは難しい（左例参照）。また、二形以上の掲出がある場合、必ずしも配当音訓字数の

少ないものを第一掲出語形とするわけではないことにも留意が必要である。更に「ホツス（欲）」「シヨウス（稱）」のような特殊音素を含むサ変動詞は原則としてそれぞれ文字数を基準に三字、四字の語と並列されるようであるが、やはり排列の乱れが確認される。なお、字数の変わり目には改行ないし星点の付されるのが原則であるが（黒川本は

星点なし)、また少なからず誤脱を有する。

□人事部

- ・リ(利) ↓リヤウ(令) ↓リツ(律) ↓リヤク(略)
- ・レイ(例) ↓レム(簾) ↓レイ(礼) ↓レツス(烈) ↓レイ(隸)
- ・エン(縁) ↓エン(宴) ↓エツス(謁)

↓エムス(豔) ↓エイ(嚴) ↓エセジ(否)

□辞字部

- ・ホコロフ(綻) ↓ホシイマ、(恣) ↓ホカラカ(朗)
- ・ナカスハリ(修) ↓ナムタクム(擽)

↓ナクサム(慰) ↓ナタラカンス(垢)

- ・ウチハヤシ(速) ↓ウチタへ(訛) ↓ウチワタス(漂)

- ・クハタツ(企) ↓クツロク(窺) ↓クワツ(決)

↓クサキル/クサトル(転) ↓ク、ミル(暗)

- ・シカウシテ(車偏十居) ↓シナ、(蹊) ↓シワサマ(三) ス(為)

- ・スミヤカニ(速) ↓スヘラク/又スヘカラス(須)

↓スクヨカナリ(健)

音注—反切注また「音—」の形で示される同音注は両部とも

ウ篇以降に飛躍的に多く現れるが、これは三巻本に先立つ形態であった二巻本の下巻に相当する部分であることとの関連であろう。音注が多く見られることは、韻書や漢籍注等からの体系的な引用が行われたことが窺われるが、それ

が全篇に亘らないことから、音注の類が編纂過程の終盤に付加されたものであることの傍証となるだろう。また漢字に付された声点は「人事部」一八二語、「辞字部」二六九語、仮名に付された声点は「人事部」七五語、「辞字部」一七五語であり、若干「人事部」の差声率が高いという結果であった(下表)。

出典名の有無

筆者は以前、三巻本字類抄の出典名の有無について述べたことがあるが「注四」、その中で、本書中に¹⁾出典注記が残された例について、同音異義語の存在との関連を指摘した。一語あたり

の用字数が多い「辞字部」に比較的多くの出典注記が現れたことは、このことと齟齬しない結果である。

またこれに関連して、下表に各部の注記の比率を示したが、「熟語・例文」数は「人事部」二一八(約一八語に一語)、「辞字部」九

	音注				注文				
	反切	音一	声点漢字	声点仮名	字体	意味用法	熟語例文	出典	関連語
人事	276	29	182	75	51	128	218	5	13
%	7.08	0.74	4.67	1.93	1.31	3.29	5.60	0.13	0.33
辞字	708	103	269	175	115	328	940	26	4
%	6.23	0.91	2.37	1.54	1.01	2.89	8.27	0.23	0.04

四〇（約一二字に一字）と、やはり「辞字部」に多く出る結果となっており、一つの見出し語への配当漢字が多いことに伴って、一字一字についての注釈の必要性がより大きかったもの（また編纂者がそのように意識していたもの）と考えられる。

五、課題と展望

以上、字類抄「人事部」「辞字部」収録語の基礎調査結果を示し、両部の特徴や所収語彙の表面的差異も明らかにした。多くは直感の裏付けられる結果となったが、注記の数などで特に両部に差異の見出されなかったものに関しては、他の部との比較でなお明らかになる部分もあるだろう。また、冒頭に掲げた「人事部」の用例のうち「イヌ／又ヌ／イネタリ（寝）」のようなものは、如何なる基準や方針でこの語形が掲出されたのか、という点や、所収語の「意味の差」についても重ねて検討が必要であろうが、稿を改めることとした。

なお、排列や方針の乱れが見られる部分でも、それが全体から見て僅かである場合は普遍的に見られる写本の誤記や原本の過誤の類として良いであろうが、（我々現代の目から見

た）不統一が全体に亘る場合は、そもそもそのような意識や意図のなかったものと結論付けることが可能である。すなわち「不統一」ではなく「意識の有無」であると認識することで、より正確に当時の辞書編纂方針に迫れるものと考えられよう。

〔注一〕『三卷本色葉字類抄』人事・辞字両部所収漢字の性格について（上）（中）（下）（『横浜国立大学人文紀要第二類語学・文学』33・34 / 1986・1987）。また峰岸氏には「字類抄の系譜（上）（中）（下）——人事・辞字両部所収語の検討を通して」（『国語国文』53（9）〜（11） / 1984）なる御論考もあるが、これは異本の比較調査を主眼とするものである。字類抄の意義分類変遷については三宅ちぐさ氏にも御論考がある。

〔注二〕吉田氏（『詩苑韻集の部類立てと色葉字類抄』 / 『本邦辞書史論叢』 / 三省堂 / 1967）は、天理図書館蔵「平安韻字集」（仮称）の分類と字類抄の分類の酷似する点を指摘されたが、築島氏（1991）に、その先後関係の極手に欠けるとの御批判があり、筆者も築島氏に従う。

〔注三〕観智院本『類聚名義抄』にも「卸鞍 クラオロス」（僧中七二）とある。

〔注四〕『先行国書と三卷本『色葉字類抄』の関係——和名

類聚抄』を中心として——（『日本語学論集』8／2012）、
「三巻本『色葉字類抄』と『和名類聚抄』の関係——『式』
注記を通して——」（『国語と国文学』90-2／2013）

〔付記〕

・本稿は、日本語学会二〇一四年度秋季大会研究発表会（於
北海道大学、大会予稿集一—三—二〇頁）の発表内容の
前半部分に修正を加えたものである。発表に際し、多くの
先生方から御指摘、御助言を賜った。記して感謝申し上げ
る。

・本研究は、平成二六年度科学研究費補助金（研究活動スタ
ート支援）の成果の一部である。

（ふじもと あかり 大学院人文社会系研究科 研究員）